

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.213
2013(平成25)年 4月18日(木)発行

▼『福島民報』に連載中の
朝倉悠三さん(会員)の「震災絵日記」

3.11東日本大震災・原発事故……私の思い 24



毎朝、腕組んで歩く老夫婦にホッと癒やされる

絵題字 朝倉 悠三(県美術協会員)



農家が米と野菜を、漁師が魚を買う無念さ

震災絵日記
絵題字 朝倉 悠三(県美術協会員)

会員の絵
& 詩

円形の聖地

青田恵子

半径20キロメートル
コンパスで引かれた円い場所
誰も住めない所です
「フクシマ」この悲しみの山河
泣き顔見せずに たえています。
行き場がなくて もがいています。
わがまま言わずに こらえています。
我が故郷
福島県相馬郡小高町
馬の町 機町の町 潮騒の町
常磐線 小高駅
その朝まで乗っていた
駐輪場にならぶ自転車
再びハンドルを握ることも
ペダルを踏むこともなく
持ち主はどこへ消えて行ったのか
あの日から常磐線は走っていない
馬が絡んだ赤錆びの鉄路
やがて樹木は
廃墟の町をやさしく抱いて眠らせる
五百年後の人々は かつてここに
浮舟城があったと知る石塊を
掘り当てるであろうか
風は駿馬の嘶きと蹄の音を
運んで来るであろうか
ふる里の川をさかのぼる鮭のごと



ひたすら営みはそれに尽き
帰る川のない私の魂は
二万四千年の間さ迷い続けるのであろうか
荊棘の森を切り裂き
二万四千年の眠りを覚ます王子は
現われるのであろうか
誰も 入ってはなりません。
誰も 触れてはなりません。
誰も 眠ってはなりません。
「フクシマ」その悲しみの大地
円形の聖地

【註】
相馬郡小高町
福島第一原発から20kmの中
にある。現在は南相馬市に合
併されたが、私の中では、旧
相馬郡小高町があること。
馬の町
千年の昔から続く騎馬による
軍事訓練。今に伝わる「相馬
野馬追い祭」は平将門が祖。
機町の町
往時は輸出用の絹織物製造が
主な産業。機屋と呼ばれた。
浮舟城
町の中心部にある城址。野馬
追いの神事が行われる。
二万四千年
ブルドニウム239の物理的
半減期。

▲青田恵子さんの詩 ○原発事故で、南相馬市から滋賀県大津市に避難している青田恵子さん(会員)の詩『拝啓東京電力様』は、会報No.206に掲載しましたが大変好評で話題になり、東京都町田市の九条の会会報にも転載されました。○この『円形の聖地』は青田さんの故郷の「旧小高町」が原発事故で根こそぎ破壊されたことを嘆いたものです。東電の賠償を皮肉った『一万円』も「月刊志賀」に掲載されています。

原爆投下の長崎で被爆し、66年後南相馬市で原発事故で二度目の被爆

▼2013年2月18日『毎日新聞』より

見えない恐怖 2度も

国際社会の警告とヒバクシャに背を向けて、北朝鮮が3回目の核実験を強行した。核拡散の脅威に包まれた中で、3月11日に東日本大震災から2年を迎える。東京電力福島第1原発事故後、福島の人々は見えない放射能におびえながら暮らしている。記録報道「ヒバクシャ13冬」は、原発事故で一時避難を余儀なくされた福島県在住の被爆者の声に耳を傾けることから始めている。

東京電力福島第1原発の半分はベッドで過ごすの北24にある福島県南という。

相馬市原町区に、長崎で11歳の夏だった。爆心被爆した男性がいる。原地から4・5キロの自宅で原発事故が起きるまで周囲パンツ一枚になり「のらに被爆者だと明かすことなくひっそりと暮らしてきたという。私は1月中旬、男性の自宅を初めて訪ねた。

「40年近く住んでいるのに、働けなかったから友達もいない。原発のことは思い出すだけでつらくて、家族にもほとんど話さなかったんです。居間のこたつで体を起こし、永尾大勝さん(79)は静かに語り始めた。一年

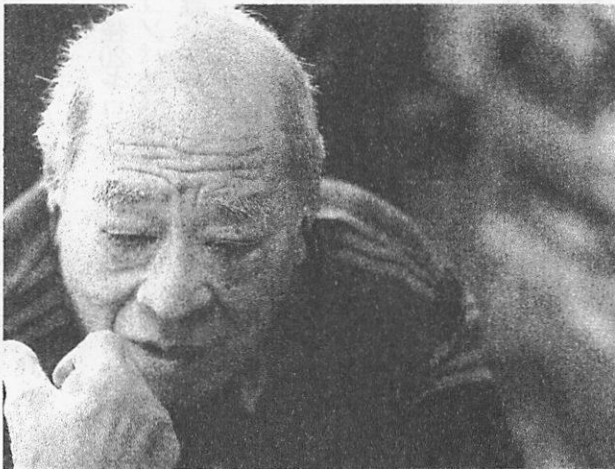
戦後上京し妻マサ子とん(7)と出会う。東京は高度成長を迎えていた。タクシー運転手として働

13冬

ヒバクシャ

広島
長崎

① 移住した南相馬で原発事故



「また、あの夢を見てね……」。原発事故後、永尾大勝さんは家族にも少しずつ原発の記憶を語り始めている。福島県南相馬市原町区の自宅で

自分が黙ってはいけな

き、子にも恵まれた頃か、下痢や手足のしびれが強くなる。「俺は負けた。だが就職面接を受けない。家族を守る」。休んでも、長崎でのことを詳んだ分を取り戻そうと必死にハンドルを握った。「仕事もあるし、空気がなくなり、マサ子さん

がスナックを始め、自身は炊事や洗濯を担った。家計が苦しく、成績の良かった長女を大学に行かさせてやれなかった悔いは今も残る。2人の子が巣立ち、還暦を過ぎてから小さな中古住宅を手に入れた。ようやく静かな時が訪れたところに、東日本大震災が起きた。原発事故の深刻化で政府に屋内退避を求められ、避難した子供たちが

れ、夫婦は窓を閉め切った部屋で身を寄せ合っていた。マサ子さんは地震で転倒して太ももを骨折していたが、町から人が消え、電話も通じない。「原発のある町に連れてきた俺のせいだ」。痛みをこらえきれず泣く妻の前に、頭を下げることでしかできなかった。1週間近くたつて食料が底を突きかけたころ、近所の人に助けられ、県外に避難した。再び放射能におびえる暮らしが始まった。少年だった夏の光景がまた夢に現れる。やけどをした生徒兵が「水をください」と足にしがみついていた。水筒の水を飲ませる

文・竹内良和
写真・宮間俊樹
11つつく

●永尾大勝さんは、1983年発行の被爆体験集『私も証言する』で、長崎での被爆体験を詳しく話されていますが、偏見を恐れてずっと「匿名」を通されてきました。しかし今回の原発事故で「二度の被爆(二重被爆)」ということになり、新聞社の取材や、映画『フクシマ2011』の撮影に応じるうちに、＜上の新聞記事＞のようにお名前の公表を決心され、率直に発言されるようになりました。●本会会員でもある永尾さんについて会報「九条はらまち」では、No.109(長崎での被爆体験)・No.170(震災後のこと)・No.180(震災後のこと・Nさんとして)・No.195(2012年8月15日『朝日新聞』投書)を掲載しています。(これらは、ネット「はらまち九条の会」会報でご覧になれます)